毎月1回25日 発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)　①

山と博物館

第 7 巻 第 1 号　　1962年1月25日

餓鬼岳遠望

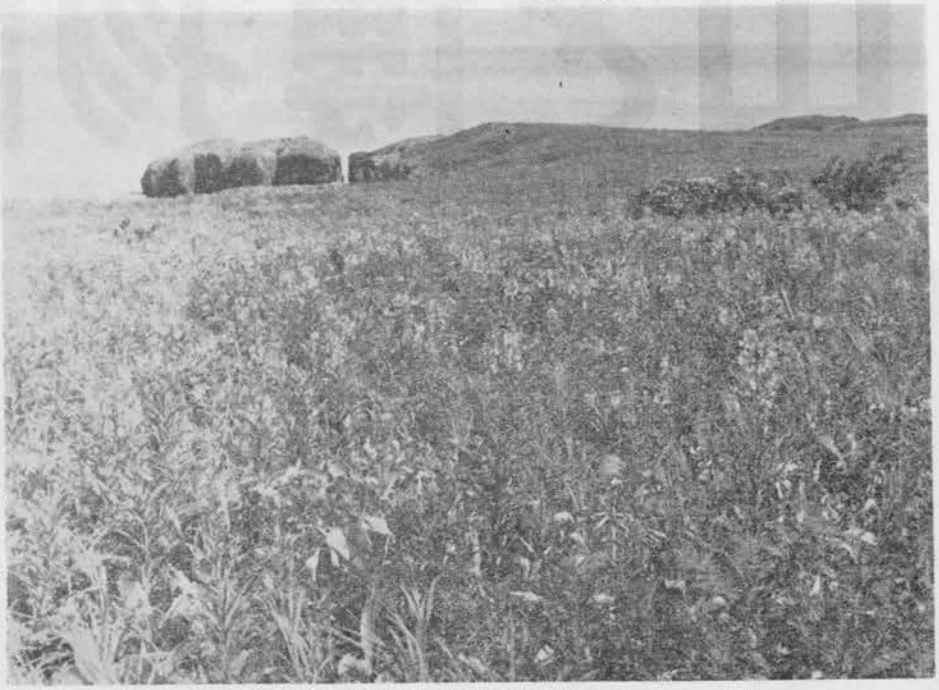
撮影　千葉彬司

大町山岳博物館

自然保護の現状

丸山 晃

自然保護について書くようにとの編集者のお達しであった。私としては小さな問題を取り扱おうと肝にめいじていたのだが，いつのまにか大それた問題に首をつっこむ結果となってしまった。わが国における自然保護の歴史は浅い。ここに述べることはそういう現状を浮き彫りにする意があったのだが，不勉強のいたすところせんじつめが足りなくて，はなはだ心もとなく思っている。大方のご批判をここにお願いしておきます。



北海道東北端の秘境，知床半島の先端，知床岬

北海道東北端の秘境，知床半島はここ二年来なにかにつけ宣伝されてきた。「さい果ての濃霧にとざされた国」そんなロマンチシズムの対象として訴えるものがあったのだろうか。否，知床のもつ原始性と国境のもつ非情と空しさが結びついて特異なものを形造っていたからだと私は思う。

それはそれとして知床の自然景観だけをとりあげたら北アルプスの比ではないばかりか，わが国のいたるところに一段と優れた景観をみいだすことができる。北アとその周辺は極めてよい自然に恵まれてはいるけれど，そのことを手ばなしでは誇れぬ。なぜなら戦中戦後の原生林乱伐，最近の林力増強計画，電源開発計画，観光開発などの波が北アにも及んで自然が急速にそこなわれ原始性が失われてきているからである。車窓からのぞく青木湖の水位は20mもさがり，白い砂礫を露出し湖沼の充溢した品位を台なしにしてしまったし，黒部峡谷の峻厳な姿も永久にほうむり去られようとしている。

川北（'61）はこうした資源開発に伴う自然の変貌について，経済の発展には資源の開発は不可欠でありそれは結局国民の福祉の増進に寄与するものであるが，これと自然保護とが対立するようであってはならないと述べていることから伺えるように，固有の自然景観が形をいちぢるしく変えて消え去っていくのには何か本質的な欠陥があるからに相異ない。

安藤（'61）が述べている水主火従という発電構成は日本の自然環境を巧みに利用したもので，今日の工業国としての地位を築きあげた大きな要因である。しかし近年この事情はしだいに壊されてきた。私たちはこれを水主火従が火主水従になってきたといっている。やまた川北（'61）の自然に接する便宜を国民に提供するということが観光事業の意義でもあろうが，それが却って自然を損うのでは本末顛倒したことになるなどに象徴的に表わされているように世界に誇りうるわが国の貴重な自然が，こうした情勢下においてあるいは余暇産業にのってそこなわれていくのは，わが国において自然保護思想がよくいきわたっていないことを如実に示している。

このことは沼田（'61）のいう次のような現状に根ざしているのではないだろうか。自然への干渉は自然保護を基本的な立場として行なわれなければならない。つまり自然資源を利用し，これから収護を得ている各種生産業に従事するもののモラルとして極めて重要であって，この点を軽視し一部の自然愛好者の特殊な運動とみなすならば，それは生産業の基盤さえ危殆にひんせしむるであろう。

古賀（'61）はわが国の自然保護を推進するために三つの点を考えるべきだとして，第一に更に強い法的規制を

もうけることを，第二に道義的あるいは倫理的な教育施策，第三に技術的あるいは学術的研究の必要性を主張している。第一の法律の現状はどうか。わが国においては関係各法によって自然保護に関する法律は相当整備されている。ここで話を水域の法令に限ってそのいくつかについて取扱ってみたい。

1，自然公園法に風致または景観維持のため国立公園あるいは国定公園の保護と利用について。(1)河川，湖沼等の水位または水量に増減を及ぼさせること，(2)水面を埋めたてまたは干拓すること，(3)利用者に不快の念をおこさせるような方法でごみその他の汚物または廃物を捨て，または放置すること（以上許可制）

2，公共用水域の水質の保全に関する法律に。(1)水質の汚濁が原因となって公衆衛生上看過し難い影響を生じているものの処理を命ずることができる。

3，水産資源保護法に。(1)水産動植物採捕(2)水産動植物に有害な物の遺棄または漏せつその他水質の汚濁(3)水産動植物の保善培養に必要な物の採取または除去(4)水産動植物の移植（以上制限または禁止）

4，漁業法に漁業調整の見地から。(1)水産動植物の採捕制限または禁止

5，河川法に。(1)流水の方向,清潔,分量，浅深または敷地の現状等に影響を及ぼす行為の制限または禁止。

6，下水道法に。(1)公共の水域に放流される水質は基準に適合するものでなければならない。

7，清掃法に，汚物を衛生的に処理することについて(1)特別清掃地域もしくは季節的清掃地域において汚物を捨てることについて処理を命ずることができる。(2)下水道または河川，運河，湖沼その他の公共水域にごみまたはふん尿をすてることをみだりにしてはならない。

第1にこれら法令にあらわれている国土保全または公共の福祉等のレベルのものでさえ所有権の乱用，順法精神怠退から充分その効力が発揮されていないことに問題がある。第2に後にふれるように自然保護についての学術的基礎づけの不足からくる法の背景に問題がある。沼田（'61）はわが国の自然保護思想の変遷について，従来わが国の天然記念物というと巨樹名木とか珍種といったものが多かったが，三好学氏あたりからはじまったこのような文化財思想はわが国の自然保護の進展にあまりプラスしなかった。かなりの面積をもった原生林のごときをこそ貴重な文化財天然記念物として保護の対象とすべきだったに端的に述べられているようにこうした面が強くうちだされなければならない。

自然保護に関する法制は国々によりさまざまであり，その発達の程度は文化水準のバロメーターともなるといわれる。田村（'59）はこの間の事情を次のように述べている。先住民の遺跡や史跡その他文化財の保護というものを考えるならばすべての国にその制度があり，稀有な地形，動植物森林などの自然物の保存，特権階級のための狩猟動物，景勝地の保護に関するものが最も古く，鳥獣保護，水源涵養，土砂流出の防止，防風等のための森林保護などの制度もかなり早くから発達し，学術上の考証や国民のリクリエイションに関するものは最もおくれて発達した。国立公園や自然保護区を設定しその自然を総合的に保護しようとする思想は欧米でも文化の進んだ国々で，20世紀の初期に盛んに提唱されるようになり，第一次世界大戦前に国際自然保護連合が発起され1948年には同連合憲章が起草わが国は1952年に加盟している。最近は南極地域の自然保護についても協定が結ばれる運びとなっている。こうした動きとともに更に強い法的規制が望まれるわけである。

第2の自然保護教育はわが国では学校教育にようやくおりこまれた段階であるし，大学にはまだ講座はない。社会教育も一般に低調である。ミシガン大学などではすでに自然保護の講座があって国際自然保護論，自然資源経済学,自然資源管理法,自然資源教育法などの教科目をようし，学としての体系が形造られてきている。

こうした現状はわが国においてまだこの方面の心棒がうすいからに外ならぬ。古賀（'61）は生命尊重を基盤とする教育施策を強調しているが，こうしたものを心にして，徳川（'61）がいうように各人の心に芽生えている各人各様の自然を愛する心に訴えその気持を正しく伸展させ公共心を養うこととあいまってその基礎を確固とすると同時に，一方緊急に先に述べた生産業に従事するもののモラルの形成につとめなければならぬ。このことは次に示す第3の学術的研究と強いつながりをもった明確な認識が先だって始めてその機能を充分発揮できる域に達するのである。

福島（'60）は南極の汚染について次のように述べている。昭和基地付近は第1次観測隊が上陸するまでは全くの処女地であった。コケを中心として藻類，菌類，それに小動物が加って，小規模ではあるが複雑な生物社会を形造っていた。ところが越冬隊員，カラフト犬が入ってここ5年位の間にも，今までの生物社会が大変みだされてきた。現在までに分離された菌類11種のうち8種は観測隊がもちこんだものといわれる。仮水汲場から流れる川には相当紙くづやごみが流れて緑藻，ケイ藻などがたくさん生育するようになったし，基地のすぐ近くの湧水の流れる湿地には緑藻，ラン藻がいちぢるしく，オングル島で，藻類のもっとも豊富なところとなっている。犬による汚染の結果である。この変化は自然破壊の初期段階におけるもので，こうした変化の極度に進んだところが北アには随所にみられる。

人類の経済生活の拡大にともなって自然はさまざまな

オングル島より南極大陸を望む，砂礫地にはナンキョクゴケを主体とする植物群落が見られる。 福島博氏撮影（1960）

影響をうける。このように変られた自然は逆に人間の生活にはねかえってくる。自然界の現象は互に密接なかかわりあいをもっており，一部が変るとそれにともない他が変ってしまう。小島（'59）は河川をダムによって貯水するとその水質は大きく変ってしまうことが予想されるとのべ，濁度，細菌は激減するけれど，滞溜中にプランクトン，とくに藻類がいちぢるしく繁殖するようになりこの結果透明度がいちじるしく低下する。こうして繁殖したプランクトンの死骸は落下して夏季においては藻層の酸素が欠乏し，腐敗を招き，臭味を起すことになるこれが春秋2期の湖の循環期に上層に及ぶことになる。このようにさまざまな形となつて障害を起すことになるのである。自然の変革はこうしたからくりを見こしておこなわれるよう対策が望まれるわけである。

知床にルサ川という川がある。背をうめるオオブキやオオイタドリでおおわれた熔岩の川床におびただしく藍色の藻類が繁殖している。原始林の中にあるこの川にすむイワナは紙キレで釣れると本田（'58）が記している。30分間になんと50尾。信州の川魚ももう昔のおもかげをとどめていない。上流域にすむイワナ，ヤマメ，それにアブラハヤも底生魚のカジカも減少してしまった。宮地（'60）の研究によると，アユは平均川巾20mの川で1kmあたり7000尾から13.000尾生息できうるというから，これらの魚の生息密度がどのようなものか，河川の生産性からみておよその見当はつく。河川や湖沼の生産についてはLindeman（'42）ら多くの研究があって，生産者（藻類など）と消費者（動物性プランクトン，水棲昆虫，魚など）これら死骸の分解者（菌類）の三者のバランスがよくたもたれ複雑な機構で動いているといわれる。

Patric（'52）はこうし生物社会のバランスがくづれる状態を種々の段階の汚染と対比させてこういう変貌が極度に進むともとの状態にもどりにくいことを指摘している。

こうした問題は四手井（'59）の天然林が人為的に破壊される場合にもこれを再びもとの状態にもどすことは非常に困難であること（回復に100年以上要する）さらに破壊した場合は決して土壌がよくなる方向には動かないこと，従つて森林の生産性が低下してしまうと述べている中にも見られる。

吉良（'59）によるとよく発達した原生林の有機物生産力は意外に高く管理された農耕地のそれをさえしのぐといわれる。したがって農林業における植物生産技術の研究課題はいかにしてこの最大の生産力に近ずくかにある原生林の生産機構のくわしい知見はいっそう重要な知見をもたらす。この種の生態的意義に関しても原生林の保護は必要なのである。

かように自然保護は沼田（'59）がいっているように，その自然的基礎は応用生態学，なかでも Population dynamics と Community dymamics の応用面にありこれは土地を自然的および経済的見地から判定するという利用可能性による土地の分類分級の方向に進むことによって，先にのべた自然保護と開発との親和点が見出されることにもなるのである。

黒部ダムの完成を控えて大町市を中心として観光開発が進められようとしている。山岳博物館が推進している針ノ木自然園の構想の実現も近い。もとよりこの構想は自然保護を背景として行われているのでいまさら強調する必要もなかろうが自然保護の問題はここに述べたように非常に困難な問題を含んでいる。保全(Presrvation)のレベルから脱した保護（Conservation）思想がよく反影されたモデル地区として国際的にみても誇り得るようなものにしていただきたい。失われた原始性をとりもどし，黒部ダムという自然への干渉をとりもどすような自然保護区の設定に努めていただきたいと思う。

（国立自然教育園）

冬山の窓口

～～観光案内所から～～

中村周一郎

山へ登ってもらうのも大変結構なことだが，今年のように遭難事故があったのではちよっと考えさせられます。〃そこに山があるから登るんだ〃という考え方にも少々疑問をもちたくなります。

気象上のいろいろな条件もあったこととは思われますが，今年の遭難事故の中に，ナダレによる遭難が全然なかったこと，これは私どもしろうとの考え方ではありますが，ちよっと以外なことのように思っております。転落あるいは吹雪による凍死，なにかこういう事故の中に今年の遭難事件の特殊性を見出そうとするのは，あながち私一人の思い過しではないでしょう。

去年の暮，十二月二十日から私は，例によって朝五時に起きて，駅前の観光案内所に詰めて，凍った空気を破って暗いホームから駅の外に流れ出す登山者の姿をながめていました。みんな元気で，寒さや，凍るような冷い風を吹きとばすような勢いで，重い靴を軽そうに，背中のザックにも何の抵抗も感じないような調子で歩いていました。

こういった姿の人々からは不吉な予感は少しも起ってこなかったのです私は来るとすぐにストーブを焚きつけて，これらの登山者の山え入る門出に，なにか私に出来るだけのことをしてやろうと思って招じ入れてストーブの周りに円陣を作らせたのです。皆喜びました。朝食をパクつく者，はがきを書くもの，話をする者，雪の様子を聞くものなど，私は楽しく，暗い朝のひとときをこれらの人々と過しました。

十一日間の此の私に与えられた行事は無事に済みました。ほんの軽微な事故はあっても世間を騒がせるような事故は，年内はなにひとつなく私はほっとして年越の酒をうまく飲み，正月を迎えました。

二十日ごろから山へ入つた人々は大体山の中で越年するわけです。あるいは元日の早朝を目ざしてアタックを試みるもの，あるいは訓練にはいる者などいろいろでしょう。そして早いものは三日ごろから十日ごろにかけて下山の計画を立てていたのです。

ところが一月一日の新聞は各地に頻発する遭難事故を伝えました。しかし私のいた案内所え立寄って私と話をした人々でないことをたしかめて，その都度私は深いため息の出ることをどうすることも出来ませんでした。このため息は安心のため息です。

やがて三日から四日へかけての新聞は私にとっては全くいやな記事ばかりがならんでいました。いよいよ地元へもこのいやな悪魔が這い寄って来たわい。少くとも大町口からはいった人々の身辺には，何の禍もないようにと私は幾度も祈念しました。

全くいやなものです。数日前観光案内所の中で，自分の子供のような若い登山者が，山のことで，親子のような親しさで話合ったのに，ちよっとのはずみで山の鬼となり，冷たいむくろで救助隊の人々に運ばれて下山するなどのことは，全くいやなものです。肉親の遺族たちとはまた違った感情で，この情景が私の心をしめつけます

私は若いころ，中央アルプスや，北アルプスを歩いただけで，山の知識は僅かしか持ってはいません。むしろ昨今の山の知識からみると無知に等しいものではありますが，今年の遭難は，しろうとなりにも，なにか私に割り切れないものを残します。こういったことは，やがて専門家が究明して，いずれは答を出してくれるものと信じていますが，それにしても，しろうとなりに山に対する，もっと深い理解があってよさそうなものではないかと思っております。

二十日から三十一日までの，私の朝の勤務で感じたことは，登山者の言動からみて，経験の浅い者が非常に多かったように見受けられました。こんなことがありました。それは学生二人のパーティーです。八方でスキーを楽しんでまだ日程が残っているので（八方でのスキーは非常に混雑していたので早く切げあげたものらしい）鹿島槍から五竜岳へ出て遠見を下り神城へ出る，山の様子はどうかというのです私は予め得た情報によって積雪量や登行路について知っているだけのことを説明してやりました。彼等は非常に喜んで，およそ一時間もかかって荷物の整理をし，必要でないのもを預けて出発しました。装備は大体においてそろっていたようです。しかしその言動には非常に不安なものが見受けられました。

たしか三日の午後だと思いますが彼等が協会を訪れました。山が非常に荒れたので目的を果さず，途中で引返した，という報告です。私は〃目的はどうでもいい，それでいいのだ，それが目的なんだ〃と思わずいってやったことを今でもはっきり覚えております。

この言葉が登山者に対する礼儀であったかどうかは，今でも私の非常な疑問としているところです。

（観光協会主任）

鹿島槍ガ岳東尾根

久保田 稔

12月29日 晴

無事一の沢の頭の下にテントを建設した。本日は僕の外にA，S，F，U，そして顧問のK先生の六名が入山する予定であったが，K先生は体調が思わしくないため一，二日遅れて入山する事になった。

幸い天気は良く，しかも完全にトレースされていたのでさして苦労することもなくこゝまで登ってきた。尾根筋もこれということもなく，春のようなうらゝかな陽差しを一杯にあびながら単調な登りを繰り返すのみであった。午後二時全員テントに入った。外は雪が舞い始めたようだ。

鹿島槍より爺ガ岳を望む

12月30日 小雪

昨晩から降り出した雪は三十センチ位積った。本日は大町からHが一人入山することになっていたので，AとFと下まで迎えにやった。Hは現在伊那にいるとのことだが，一昨年の正月以来二年ぶりの再会を嬉ぶ。

その間，僕とS，Uの三名は偵察に出た。せめて第二岩峰の見える地点まで偵察したいと思って出たが，二の沢の頭まで引き返した。たゞ灰色の雪の世界を歩んでいるのみで目的を果すことは出来そうもなかったから。一の沢の頭の下にはテントが十数張りもあった。

午後四時の気象通報を研究してみたところ一日頃から本格的に崩れるきざしが見えるので，明日は僕とUの二人でアタックに出ることに決定した。明日下山する予定のAとSのうちSにもう一日残ってもらい，HとFの三人でサポートをしてもらうことにする。出発を午前三時ときめ，早いとこシュラフにもぐり込んだ。

12月31日 曇のち晴

アタックは失敗した。試合に勝って勝負に負けた。そんな失敗のしかたで，何か割り切れないもやもやしたものが残る。悪戦苦斗の末失敗したのならともかく，八割近くをサポート隊にラッセルさせ，さてという段階で人為的に時間を浪費させられ登頂を断念せざるを得なかったのだから……。やはり年末年始はポピュラーなルートを避けて，人の入らない静かな山を求めるべきだったと思う。

紅茶とビスケットの簡単な朝食をすませて予定どおり三時にテントを出た。雪は止んでいたが，昨日つけたトレースは完全に消えていた。黙々とラッセルを続ける三人の後を歩みながら，本日は何としても北峰に立ちたいと思った。わずかな月明りにぼんやりと浮き上って見える荒沢尾根，天狗尾根が印象的であった。星はなく，半月もぼんやりと見えたりかくれたりであまりすっきりした天候ではなかったが，風が無かったのは幸いだった。一昨年北葛岳をアタックした時もこんな天気だった。途中にあったテントはどれもまだ起き出した様子はなかった。今日はアタックする積りはないのだろうか。コルからの登りは傾斜もきつく，雪積も胸まであり，しかもテントを出てから五時間以上をたっているので，三人のラッセルのピッチは目に見えてにぶってきた。荒沢尾根とのジャンクションでサポート隊と別れるべく一服していたところへD大学の十数人のパーティが追いつき先をラッセルし始めた。第一岩峰はザイルでフクックスされていたので簡単に通過できた。第一岩峰の上でD大学パーティが一服したので再びトップに出てラッセルを始めた第二岩峰に先に取付くべく……。しかし，人海戦術でくる彼等に対抗するには二人では無理だった。あえぎあえぎ六十米も登っただろうか，〝私達に先をやらせて下さい〟とあっさり先へ出られてしまった。そして第二岩峰を目の前にして空しく引き返さなければならないとは…

…，時計は十一時前で，充分時間的余裕はあったのだが…。いつの間に晴れ上ったか素晴らしい上天気で，右手に天狗尾根，左手に爺ガ岳，赤岩尾根が手にとるように見える。荒沢の頭もすぐ目の前だ。第二岩峰は割合すっきりした岩場で面白そうだが，連中が遅々として登り切らず，一時間，また一時間と時間は空しく過ぎて行くばかり。切歯扼腕止むを得ず荒沢側を捲きだしたが，荒沢の頭から拡がる雪面には大きな亀裂が無数にあり，時々昨晩降り積った新雪がザザーと落ちており，あまり気持の良いルートではない。時計はすでに二時をまわったが第二岩峰の上に出るにはまだ相当時間がかゝりそうだしそれから先もアルバイトがありそうだ。それにこんな時間に沢筋でもたもたしている手もないし，せっかくサポートしてくれた三人には申し訳ないが，いさぎよく引返すことにした。頂上に立つことだけが全てではあるまい我々はいつかまた登るチャンスがあるだろう。こゝまでトレースをつけたこと，そのことに大きな意義があるんじゃないだろうか。明日は我々のつけたシュプールを多くの岳人達がたどることだろう。

Aとサポートに残ってくれたSが時間に間に合ったので下山し，K先生が入幕した。また先生の後輩と称する山男が二人転がり込みにぎやかになった。しかし，さすがに疲れた。

1月1日　晴のち雪

新年おめでとう，本年は幸先がいゝ。北峰アタックに成功した。簡単である。

天候は午前中はともかく，午後から崩れめ始め当分行動できる日は巡ってこない事は天気図を見てもあきらかで，当然本日は再アタックをねらうべきであるが，昨日のアルバイトがこたえたか皆登頂には気乗り薄であったリーダーである僕が本日は停滞という気持になってしまった事はまづかった。体力，気力ともトレーニング不足である。K先生に励まされて，K先生，F，Hの三名がアタックに出かけ僕と0は一時間遅れて後を追った。陽は暖かく，天気が崩れる前にしては風がなかったので，各パーティ一斉に行動を起したものと思う。荒沢の頭，第二岩峰附近に点々と黒い人影が見える。赤岩尾根，天狗尾根また同様であった。

だが，何故か僕の調子は良くなかった。足は重くふらついていた。第一岩峰を登ろうとして上を仰いだとたん軽い目舞いを覚え，これ以上登ることを断念し，Vだけ先へやる。原因は入山前の疲労がそのまゝ持ちこされたものと思う。

正午に下からT，Cの二人が登ってきた。ごっそりと差し入れのごちそうを担いで。

二時過ぎに四名とも無事に帰ってきた。第二岩峰はやはり荒沢側を捲いたそうだ。Fあたりは相当ハッパをかけられて登ってきた様で，冬山は始めてであるFが頂上に立ったことの良否はともかくとして，長い間下積みを重ね，今回もはるばる伊那からかけつけてくれたHが，始めてそれも元日に冬山の頂き立てた事は本当に良かったと思う。夜，落語に聞き入る彼の顔は明かるかった。そして我々は本当の美しい顔を初めてそこにみた。

第2岩峰を行く

夕方から風雪は強くなった。

1月2日　風雪

天候はますます悪化してきた。当分行動は出来ないだろう。K先生とHは予定を繰り上げて帰っていった。我々も一日繰り上げて明日下ろうと思うテントの雪かき，それにも増してきじを打つのが辛かった。

1月3日　風雪

風雪をついてテントを撤収，全員無事大町へ帰ってきた。このところ山の遭難事故が多発しており家族や関係者に大変心配をかけたようだ。

今回の山行を通じて我々は多くのものを得た。他パーティから学ぶ点，いやむしろ批判すべき点の方が多かったかもしれない。それらのことをじっくり反省し，更に高きを求め困難をのりこえて進んで行きたいと思う。

（大町山の会）

私は思う

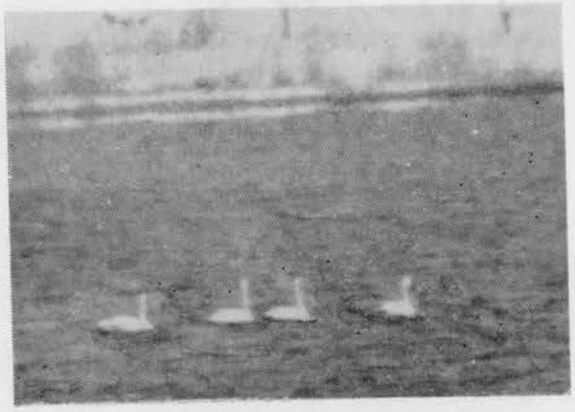
こゝにかゝげた一葉の写真は昨秋後立山の岩小屋沢岳山頂で撮影したもので，ごらんのように落書があまりひどいので敢て発表したまでだが一人この山のみでなく北ア全山の道標が多かれ少なかれこのような被害にあっていると言っても過言ではあるまい。上高地の白樺の幹や合戦小屋の柱，腰板・白馬頂上の方向指示板なども同様の落書や彫刻でいっぱいなのは甚だ残念なことである登山者を含む旅人はその目的地に達すると自分の足跡を記念する為に何等かの形式で表現しようとする本能的な心理にかり立てられるものだが，それはカメラや筆などによる方法と直接現地にケルンを積んだり樹木や岩石などに署名して自己満足する原始的な手段とに分けられるようである。前述の落書などは後者の悪質なものであり登山者の風上にも置けない輩であろう。それにつけても昨今の登山者の公衆道徳は低下を極め眼に余るものがある。特に夏山の登山路周辺は紙屑と空カンそれに近年はポリエチレンの袋まで加わってまるでゴミステ場の中を歩いているようだ。

この汚なさは展望が素晴しい環境だけに余計みじめである。特に許せないのは悪質な悪戯であろう。昨年も白馬頂上で女連れの一見ミーハーパーティと思はれる連中が正面尾根側のルンゼへ盛んに石を投げ落していたのに出合ったし，唐松岳では学生風の登山者が指導標を逆に差し替えているのを目撃し注意したこともあったこのような事例をあげれば切りがない，願わくば，登山者は常に謙虚な気持でありたいものである。　(福島融)

博物館だより

オオハクチョウ青木湖へ

36年12月27日青木湖に4羽のオオハクチョウが訪れた地元の人達は待ちに待ったオオハクチョウが訪れたと喜こび，早速エサまきが行なわれたが，数日間その姿を青木湖に浮べたのみで，いずしともなく飛び去り，地元の子供たちを淋しがらせた。



資料寄贈

金沢文庫研究No 68　金沢文庫，信州緑化情報No 31　北安地方事務所，自然保護No 5　日本自然保護協会，樽火No293,294　山小屋クラブ，わらじNo46　わらじの仲間，地質調査所月報No121～123　地質調査所，国立科学博物館研究報告No48　国立科学博物館，地質ニュースNo82　地質調査所，独標No77,83,84　独標登高会，山とスキーの会報No136　朝日新聞山とスキーの会，南アルプス北部　北村武彦，十和田湖国立公園の淡水産プラナリアの生態調査報告・下北半島の淡水産プラナリアの生態調査報告　川勝正治，Natune Study No 7，8　大阪市立自然科学博物館，モンキーNo43　日本モンキーセンター，四つばしNo 61－7　大阪市立電気科学館，北安曇郡白馬村及びその附近のシャクガ　宮田渡，金沢文庫研究No7,7　金沢文庫，　(敬称略)

都合により〃南アルプスに植物を追つて〃(2)は次号に載掲いたします。

山と博物館　第7巻第1号　1962年1月25日発行
発行所　長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場